

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：羽生 紀子

研究分野	研究内容のキーワード	
日本近世文学, 日本出版文化史	井原西鶴, 浮世草子, 出版文化	
学位	最終学歴	
博士（文学）, 修士（国語国文学）, 学士（国文学）	武庫川女子大学大学院 文学研究科 国語国文学専攻 博士後期課程 修了	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 大学院の論文指導および研究題目	2019年4月～2021年3月	2020年度修士論文研究指導 修士論文題目「芭蕉の人生観・死生観―書簡と作品を通じて―」
2. 国文学研究（古典）理解のための教育の実践	2018年4月～2020年3月	「日本古典文学概論」（大日1年必修）では、国文学の歴史や学問としての体系に関する知識の習得を目指している。学的体系の理解を通して、日本語日本文学科で4年間学ぶ意義について再認識する機会ともなるよう、常に学生の問題意識の喚起を図っている。
3. 日本古典文学の読解力養成のための教育の実践	2014年4月～	「古文入門」（大日1年必修）では、専門的な国文学研究を行うための古文読解力の養成を目指している。毎回、作品の一部分を学生自身の力で読解し、その文章の背景や意味を考えることにより、文学作品として読み込む力の修得を図っている。
4. 文章力養成のための教育の実践	2012年4月～2020年3月	学生の実践的な文章能力の養成を図る。教員による単なる添削指導ではなく、自らの気づきに基づく総合的な文章能力の向上を目指している。「日本語表現演習」（大日2年必修科目〈2年次演習〉）で実践している。
5. 大学院の論文指導および研究題目	2011年04月～2013年03月	2012年度修士論文研究指導 修士論文題目「『御伽文庫』の刊行事情―渋川清右衛門の活動と『御伽文庫』の本文―」
6. 情報処理技術を活用した日本近世文学研究の実践的指導	2008年04月～現在	演習では、従来の古典文学研究の手法だけではなく、より積極的に各種データベースを駆使して情報処理を行い、研究に活用するように指導している。社会で役立つ実践的な能力の養成を目指している。
2 作成した教科書、教材		
1. くずし字の読解力養成のための教材の作成	2016年04月～現在	専門的な国文学研究には欠かすことのできない「くずし字」を解読するスキルの養成を目指して、独自の教材を作成している。「古文入門」（大日1年必修）や古文関係の授業で活用している。
2. 日本近世文学を理解するための教材の作成	2016年04月～現在	日本近世文学の本質的な理解のために、時代背景や作者についての解説および主要作品の一部本文について、独自の教材を作成している。「近世文学講読」（大日2年）、「近世文学研究」（大日3年）などで活用している。
3. 卒業論文作成のための手引きの作成	2015年04月～現在	スムーズに卒業論文の作成に導くために、ゼミ独自のマニュアルを作成している。基礎調査の方法、論理的な文章の具体的な書き方など、わかりやすく解説している。「演習Ⅰ」（大日3年必修）、「演習Ⅱ」（大日4年必修）、「卒業論文」（大日4年必修）で活用している。
4. 日本古典文学の全体像を理解するための教材	2012年04月～現在	日本古典文学の全体像を把握するために、各時代のメディア的特徴や時代背景、主要作品について独自の教材（プリント）を作成している。「日本文学概論」（大日1年必修）、「日本文学入門」（短日1年必修）などで活用。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 西宮市生涯学習大学「宮水学園」講師	2008年09月～2014年12月	文学コースやマスターコースの講師として、社会人の生涯学習に携わった。（2008年）「井原西鶴の世界―

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
がわかる 浮世草子大事典				な事項を項目化することにより、江戸時代の社会・風俗についての理解を深めることができる事典。執筆項目は、『梶久二世の物語』（pp.855～856）、『好色影倣子』（pp.311～312）、『けいせい竜照君』（pp.258）、『武道近江八景』（pp.742～743）、『けいせい哥三味線』（pp.254～255）、『世間侍婢気質』（pp.517～518）、『西鶴本の書肆』（pp.51～52）。
2. 近代大阪の出版	共	2010年02月	創元社	羽生紀子, 平野翠, 青木育志, 石田あゆ, 旭堂南陵, 吉川登, 小野高裕, 大谷晃一, 増田のぞみ共著。「江戸時代の大坂出版界—出版メディアを支えた大坂本屋仲間—」を執筆した。江戸時代の大坂は本の都市であった。本の都市として機能した大坂を創り出した本屋仲間の役割について、具体的に明らかにした。(pp.1～26)
3. 狂歌浦の見わたし（「近世上方狂歌叢書」29）	共	2002年03月	和泉書院	西島孜哉・羽生紀子共編。「狂歌浦の見わたし」（蝙蝠軒魚丸発起。文化9年〈1812〉刊行）の翻刻を担当（pp.1～51）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
4. 狂歌よつの友（「近世上方狂歌叢書」28）	共	2001年03月	和泉書院	西島孜哉・羽生紀子共編。「絵賛常の山」（玉雲齋貞右詠。寛政5年〈1793〉刊行）の翻刻を担当（pp.45～92）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
5. 西鶴と出版メディアの研究	単	2000年12月20日	和泉書院	458p 武庫川女子大学に提出した博士（文学）学位論文を出版したもの。近世中期の浮世草子作者井原西鶴の創作活動と、出版環境との相関について論じた。西鶴の関わった書肆（岡田・森田）や大坂出版界の状況を明らかにし、西鶴の作家的成長に出版メディアが大きな役割を果たしていたことを具体的に論じた。平成12年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）助成図書。第22回（2001年）日本出版学会奨励賞受賞。
6. 狂歌泰平楽（「近世上方狂歌叢書」27）	共	2000年03月30日	和泉書院	西島孜哉・羽生紀子共編。「除元狂歌小集」（雄崎貞右撰。天明3年〈1784〉刊行）、「除元狂歌集」（雄崎貞右撰。天明5年〈1786〉刊行）の翻刻を担当（pp.39～63, pp.88～109）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
7. 嬾葉夷曲集（「近世上方狂歌叢書」26）	共	1999年3月	和泉書院	西島孜哉・羽生紀子共編。「狂歌二翁集」（蝙蝠軒魚丸撰。享和3年〈1803〉刊行）、「狂歌玉雲集」（玉雲齋貞右撰。寛政2年〈1790〉刊行）の翻刻を担当（pp.33～55, pp.56～79）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
8. 狂歌西都紀行（「近世上方狂歌叢書」25）	共	1998年03月	和泉書院	西島孜哉・羽生紀子共編。「狂歌西都紀行」（桑田抱臍詠。文化元年〈1804〉刊行）、「狂歌ふくろ」（栗枝亭蕪園撰。享和2年〈1802〉刊行）の翻刻を担当（pp.1～24, pp.25～75）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
9. 狂歌気のくすり（「近世上方狂歌叢書」24）	共	1997年01月	和泉書院	西島孜哉・光井文華・羽生紀子共編。「狂歌阿伏兎土産」（桑田抱臍詠。天明7年〈1788〉刊）、「狂歌まことの道」（如雲舎紫笛詠。明和7年〈1770〉刊）の翻刻を担当（pp.40～45, pp.69～85）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
10. 興歌牧の笛（「近世上方狂歌叢書」23）	共	1996年03月	和泉書院	西島孜哉・光井文華・羽生紀子共編。「酔中雅興集」（湖月堂可吟詠。安永7年〈1778〉刊）、「狂歌ことはの道」（紫髯ほか撰。安永7年刊）の翻刻を担当（pp.23～33, pp.55～71）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
11. 五色集	共	1996年01月	和泉書院	西島孜哉・光井文華・羽生紀子共編。「五色集」（自然軒鈍全詠。写本）「黄の巻」の翻刻を担当（pp.24～43）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
12. 古新狂歌酒（「近世上方狂歌叢書」21）	共	1995年01月	和泉書院	西島孜哉・光井文華・羽生紀子共編。「古新狂歌酒」（白縁齋梅好撰。安永3年〈1774〉刊）、「浪花のながめ」（白縁齋梅好撰。安永7年刊）の翻刻を担当（pp.1～7, pp.23～55）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
13. 日本文学の男性像	共	1994年05月	世界思想社	西島孜哉編。IV-1「歌舞伎物と剽軽物」および「日本文学史略年表」を執筆。『恨の介』『竹斎』『浮世物語』を取り上げ、仮名草子の主人公の精神性について考察した。近世の庶民文化の出発と共に芽生えた仮名草子の主人公は、伝統的な権威の殻を破って生きようとする人々の精神を内包している。しかしその近世的徴証は主人公の内部に留まるもので、主人公の論理は伝統的な権威に寄り掛かったものに過ぎなかった。しかし仮名草子の主人公の自己のあり方への悩み、存在理由への問いかけは、浮世草子の時代を導く積極

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
14. 興歌帆かけ船（「近世上方狂歌叢書」20）	共	1994年3月	和泉書院	的価値をもつものであった。（pp135～147）略年表は、時代別の主要文学ジャンルの変遷が容易にとらえるように配慮して作成。（pp.265～295） 西島孜哉・光井文華・羽生紀子共編。「興歌帆かけ船」（雪縁斎一好詠。明和5年〈1768〉刊）、「狂歌浪花丸」（白縁斎00梅好編。明和8年刊）の翻刻を担当（pp.1～14, pp.15～37）。 また書誌調査・解説執筆に協力した。
15. 興歌百人一首嵯峨辺（「近世上方狂歌叢書」19）	共	1993年03月	和泉書院	西島孜哉・光井文華・羽生紀子共編。本叢書は西島孜哉氏の企画により、近世上方狂歌資料の整備・公開を目的に昭和59年より刊行が開始された。羽生は平成5年より参加。編著者共同のワープロ入力・編集作業により版下を作成、写植印刷によって刊行している。本号では「興歌百人一首嵯峨辺」（中川度量撰。天明7年〈1787〉刊）の翻刻を担当（pp.1～29）。また書誌調査・解説執筆に協力した。
2 学位論文				
1. 西鶴と出版メディアの研究	単	1999年3月25日	武庫川女子大学	博士（文学）学位論文。2000年12月、和泉書院より同タイトルにて刊行。
3 学術論文				
1. 『新可笑記』巻五の三「乞食も米になる男」の検討—室町幕府第八代將軍足利義政と東山文化—	単	2025年3月31日	武庫川国文 第98号 pp11～27	素材、重層世界を明らかにすることにより、本章の三層構造について論じた。本章においては、いついかなる時にも御家の役に立つことが描かれている。素材は栗山大膳、伍子胥、方長老、宿瘤女であり、さらに重層世界に音阿弥、善阿弥が取り上げられていた。「乞食も」（章題）という落ちぶれた境遇、また避け得ない境遇であっても、「武士は心の朽ちせぬ浮世の事」（目録副題）とあるように、「心」、すなわちその忠義の心や優れた芸風や技術を持ち続け、「米になる」、御家に役に立つ「重宝となる」ことを取り上げているのである。
2. 『本朝桜陰比事』論の前提—『新可笑記』との「比事」的構想—（査読付）	単	2025年3月4日	武庫川女子大学紀要 第72巻 pp1～9	『本朝桜陰比事』（元禄2年〈1689〉正月刊）は、裁判を題材とした作品である。そのわずか2ヵ月前には『新可笑記』が刊行されている。従来、『桜陰比事』と『新可笑記』の関連性については重視されてこなかったが、本稿では両書が対比的な意図をもって創作されていることについて検討した。創作時期の重複、また副章題や序文・署名・印記のあり方からは、『桜陰比事』が『新可笑記』と対比的な関係性の中で創作されたことがわかる。さらに内容的には、『桜陰比事』が24グループに分けられ、それぞれのグループは『新可笑記』の各章と対応関係にあることを論じた。『桜陰比事』の各章については、今後、具体的に検討していくことになるが、『桜陰比事』は『新可笑記』との「比事」的構想のもとに創作されていたと結論した。『新可笑記』の「比事」として創作されていることによって、『桜陰比事』においても重層性が獲得されているのである。
3. 『新可笑記』巻五の二「見れば正銘にあらざり」の検討—足利義輝と足利義教、永禄の変と嘉吉の乱—	単	2025年2月26日	日本語日本文学論叢 第20号 pp1～28	素材、重層世界を明らかにすることにより、本章の三層構造について論じた。素材は室町幕府第六代將軍足利義教の暗殺事件であり、そこに重層世界（第三層）として、同じ下剋上の事件である第十三代將軍足利義輝の暗殺事件が重ねられている。章題「見れば正銘にあらざり」は、本話（第二層）の浪人が持ってきた「貞宗」の刀が「正銘」でないことを指しているが、それは素材（第一層）の足利義教が「正銘」「正道」でないことを嵌め込み、さらに重層世界（第三層）の足利義輝も同じく「正銘」「正道」でないことを重ねていたのである。
4. 『新可笑記』巻五の一「槍を引く鼠の行方」の検討—室町幕府第九代將軍足利義尚と長享・延徳の乱—	単	2024年10月21日	武庫川国文 第97号 pp1～15	本章においては、「鼠」に注目させることにより、「忍び調練の侍」はこそそと悪事をはたらく悪であり、邪道であることを意識させている。目録副題「武士は眼前にまことを見出だす事」のように、武士は悪や邪道を見抜き、正道を行う存在であることを強調しているのである。西鶴は、素材である「まいす者嫌ふ三ヶ條の事」（『甲陽軍鑑末書結要本』）では成敗されている忍びには注目せず、「崑崙奴」の行方をくらしめしてしまう磨勒の方に注目している。そこに、本話の鼠の「ゆくゑ」を嵌め込み、重層世界では、足利義政や義尚、さらに義材の討伐を連れて、生き残り続けた六角高頼が重ねられるのである。本章の主題は、悪や邪道は、根絶するこ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
5. 『新可笑記』巻四の五「両方一度に神おろし」の検討—後北条氏の小田原籠城と滅亡—	単	2024年4月5日	武庫川国文 第96号 pp9~22	とが困難であるが、武士は常にその悪を見抜き、「正道」であるべきだということである。室町幕府第九代將軍足利義尚の將軍としてのあり方が重ねられていたのである。(pp.1~15) 本章の主題として、武士の「神おろし」誓約、起請文などに対するあり方が取り上げられている。巻4は、武士のあり方の否定的な側面を取り上げ、そのことによって「滅び」た武將を類聚していた。本章でも、素材の「善悪二人」である、仁木義長、北畠頭家、三浦一族は「滅び」の武將である。ただ頭家は、善であっても「天運」ということで「滅び」となっている。それに対して重層世界として重ねられた北条氏政と徳川家康の二人のうち、善の家康は「滅び」の武將ではない。滅びの武將でない家康を称揚して、巻4を結ぶためであると同時に、それは次の巻五への展開をはかるためのものでもある。
6. 『新可笑記』巻4の4「書置の思案箱」の検討—今川義元の出家・還俗と今川氏の滅亡—(査読付)	単	2024年3月12日	武庫川女子大学紀要 第71巻 pp1~9	本稿では、『新可笑記』巻4の4の3層構造について論じた。第1層(素材)には宇都宮頼綱が取り上げられている。頼綱は四男を家督継承者とし、自身は出家することで一族の破滅を救った武將である。第2層(本話)において、長男は出家したものの、出家に徹することができずにいた。第1層が頼綱であることを踏まえると、この長男は還俗し、武將として活躍したものと解釈できる。そして第3層(重層世界)は、今川義元である。幼少期に出家した義元はやがて還俗し、猛將として今川氏の最盛期を築いた。西鶴は器量による家督相続の典型として、素材の宇都宮頼綱を取り上げ、重層世界に今川義元を重ねているのである。
7. 『新可笑記』巻四の三「市に紛るる武士」の検討—「滅びの武將」尼子氏の滅亡と再興の挫折—	単	2024年2月12日	日本語日本文学論叢 第19号 pp15~39	『新可笑記』巻4の3の3層構造について論じた。「滅びの武將」とそれに仕える武士の素材として、大友義統と立花道雪、源頼家と比企能員、さらに仁田忠常を取り上げて本話は創作され、その素材を駆使した長物語を「市に紛るる男」である隠棲者が、「意味深き市人」である「市に紛るる武士」鴻池新六に話しているのである。新六は隠棲者の話を聞きながら、重層世界として尼子義久と自己の父山中幸盛の逸話を重ねているのである。
8. 『武道伝来記』巻一の一「心底を弾琵琶の海」の検討—本能寺の変の位置づけ・明智光秀への視線—	単	2023年10月5日	武庫川国文 第95号 pp1~21	『武道伝来記』巻1の1が、明智光秀の本能寺の変に対する位置づけを主題としていることについて論じた。光秀の本能寺の変は、第一層の素材にあたる。光秀の築こうとした新しい武士の世界、それを平尾修理・眼夢の大願として、第二層の本話を創作している。その上で、第三層の背景世界としては、今の徳川の世の徳川家光の事例を重ねているのである。
9. 『新可笑記』巻四の二「歌の姿の美女二人」の検討—「滅びの武將」源実朝の暗殺と源氏將軍の終焉—	単	2023年3月27日	武庫川国文 第94号 pp9~23	『新可笑記』巻4の2の三層構造について検討した。従来、素材として武田信玄の逸話が指摘されてきたが、第三層の重層世界に源実朝が重ねられていることを明らかにすることによって、本話の新たな読みを示した。西鶴は歌道耽溺を武士にあるまじき「滅び」の原因として戒めているのであるが、それと同時に、鎌倉幕府の武士であるのに、京文化や歌へ傾斜せずいられず執心して滅びてしまった武將としての実朝を、『卒都婆小町』を取り上げることによって、小町を慕って叶わなかった深草少將に重ねたのである。
10. 『新可笑記』巻三の五「取りやりなしに天下徳政」の検討—鎌倉幕府第九代執権北条貞時と永仁の徳政令・霜月騒動・平禅門の乱—(査読付)	単	2023年3月8日	武庫川女子大学紀要 第70巻 pp1~9	『新可笑記』巻3の5の3層構造について検討した。本章の「徳政」は、直接的には寛文元年(1661)相對済し令を踏まえており、西鶴は逆転の趣向を繰り返しながら、典拠である郭巨の逸話を、その息子の成長物語として創作した。さらに第三層の重層世界としては、北条貞時の逸話を重ねていることを明らかにした。
11. 『新可笑記』巻四の一「船路の難儀」の検討—「滅びの武將」源義経の都落ちと静・郷御前—	単	2023年2月20日	日本語日本文学論叢 第18号 pp37~60	『新可笑記』巻4の1の三層構造について検討した。本章の主題は、武將は、正しく国を治め、武士の本分をまっとうすべきなのに、それ以外の、「美女のもとあそび」に執心し、そのあるべき姿を踏み外して、滅びてしまった武將の「過ぎた」あり方を戒めるものである。女性への愛ゆえにどうしても「良い加減といふ考へ」になりえずに滅びてしまった武將として源義経を重ね、また素材としての荒木村重の滅びを取り上げていることについて論じた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12. 『武道伝来記』巻一の四「内儀の利発は替た姿」の検討―黒田官兵衛・竹中半兵衛、さらに前田利家の逸話―	単	2022年9月	武庫川国文 第93号 pp1~12	『武道伝来記』巻1の4の三層構造について論じた。本章については、従来素材等が指摘されることはなかったが、黒田官兵衛の忠義やそれにかかわる竹中半兵衛の逸話が素材であることについて論じた。さらに第三層の背景素材としては、前田利家の拾阿弥殺害と帰参の逸話が重ねられていることを明らかにした。
13. 『武道伝来記』巻五の一「枕に残る葉違ひ」の検討―『新可笑記』の三層構造の先がけとして―	単	2022年3月30日	武庫川国文 第92号 pp11~26	本稿では『武道伝来記』巻5の1について、新たな素材として『石山医案』などを指摘することによって、玄芳・周益の「種方付」がフィクションであり、李朱医方派と古医方派の争いを二人の「種方付」の対立によって顕在化したものであることを明らかにした。背景素材（第三層）として筒井順慶と松永久秀の長年の闘争が描かれていることについて明らかにした。この三層構造は不完全なものであったが、『新可笑記』につらなる創作手法の先がけとして位置づけられることを論じた。
14. 『新可笑記』巻三の四「中にぶらりと俄年寄」の検討―鎌倉幕府第八代執権北条時宗と元寇・二月騒動―（査読付）	単	2022年3月8日	武庫川女子大学紀要 第69巻 pp1~9	『新可笑記』巻3の4の三層構造について検討した。本章の素材である謡曲『高砂』、草誕の故事、姫路城の大改修が、第二層の本話においていかに機能しているのかを明らかにし、さらに『御成敗式目』34条が踏まえていることを明らかにした。そしてさらに第三層としては、鎌倉幕府第8代執権・北条時宗による二月騒動の討伐と元の襲来に備えた防塁の築造が描かれていることについて論じた。前章までと同様、本章も武士の知略、鎌倉幕府のあるべき姿を追究する知略が主題とされており、時宗の知略と善政、さらには鎌倉幕府を寿ぐ姿勢が認められるのである。
15. 『新可笑記』巻三の三「掘れども尽きぬ仏石」の検討―鎌倉幕府第四代執権北条経時と鎌倉大仏―	単	2022年2月12日	日本語日本文学論叢 第17号 pp79~100	本章の第一層の素材が『太平記』巻三十八「政道雑談巻」の中の「青砥左衛門賢政の事」に見られる逸話であることを指摘した。そのことにより、第二層の本話が「世の費え」の本当の意味を問う話であることを論じた。さらに第三層の重層世界は鎌倉幕府第四代執権である北条経時の、大仏造立と第四代将軍頼朝の更迭という逸話であることを論じた。
16. 『新可笑記』巻三の二「国の捷は知恵の海山」の検討―鎌倉幕府第三代執権北条泰時と「御成敗式目」制定―	単	2021年8月31日	武庫川国文 第91号 pp17~32	本章の第一層の素材が『太平記』巻三十八「政道雑談巻」であること、第三層の重層世界として「御成敗式目」が重ねられていることを明らかにした。素材を駆使した第二層本話の面白さは、回国の修行者が、国の末々のさまざまな出来事の「子細」や「思はく」を見抜くというところにあり、それを仕置きに生かそうとする姿勢にある。第三層では、北条泰時の「御成敗式目」の制定を重ねて、鎌倉幕府の執権の政事の「新しさ」（道理）を描いているのである。
17. 『新可笑記』巻三の一「女敵に身替り狐」の検討―鎌倉幕府への視線：執権北条時頼と近衛幸子密通事件―	単	2021年3月20日	武庫川国文 第90号 pp9~20	本章の素材が天満の商人、光源氏、中将姫の継母、高師直の説話であることを指摘した。さらに仕置者、板倉勝重・重宗父子から、執権北条時頼・時宗父子を想起させ、近衛幸子の密通事件と将軍宗尊の追放へと話を展開している。この北条時頼の執権としてのあり方が第三層として重ねられていることについて明らかにした。
18. 『新可笑記』巻二の三「胸を据えし連判の座」の検討―戦国武将徳川家康と小早川秀秋寝返り事件―（査読付）	単	2021年3月12日	武庫川女子大学紀要 第68巻 pp1~9	本章には『北条五代記』の利用が指摘されていたが、近世期の著名な武士木村重成の2つの逸話が素材であることを明らかにした。一つは重成が大坂夏の陣・若江の戦いにおいて命を落とした際、伽羅を焚きしめお歯黒をつけていたとするものであり、もう一つは、大坂冬の陣の和睦が成立した際に、重成が家康の本陣に向いて家康と対峙したというフィクションである。さらに重層世界としては、小早川秀秋の裏切り事件と三河一向一揆が重ねられていることについて明らかにした。このような話題を展開することによって、西鶴は武士の正しいあり方を描いているのである。
19. 『新可笑記』巻二の四「兵法の奥は宮城野」の検討―戦国武将伊達政宗と遣欧使支倉常長・松平忠輝事件など―	単	2021年2月12日	日本語日本文学論叢 第16号 pp21~55	本章の素材が木村重成・柳生十兵衛などの逸話であることを指摘した。そして本話では、長期間の修行により外流に達し、さらに堪忍を重ねて最後に成功し、名誉を回復するという武士のあり方を描いていたことを明らかにした。そして重層世界としては、伊達政宗の、戦国を生き抜いた独創的・特異な武将としてのあり方が重ねられていたことを論じた。
20. 『新可笑記』巻二の二「官女に人の知ら	単	2020年11月01日	武庫川国文 第89号 pp23~34	本章の素材が玄宗と楊貴妃・鍾馗の逸話であることを指摘し、その悲恋物語から、武烈と暁の少納言・夕日の太夫の道理を重ねる話

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
ぬ灸所」の検討―戦国武将織田信長と比叡山焼き討ち事件―				へと改変されていることを明らかにした。さらに重層世界は信長の比叡山焼き討ち事件であり、目録副題「武士とは格別長袖の事」は主題を示すもので、重層世界を示す重要なシグナルであったこと、「長袖」には、僧侶が重ねられていたことを論じた。
21. 『新可笑記』巻一の五「先例の命乞ひ」の検討―戦国武将豊臣秀吉の生き方と千利休切腹事件―（査読付）	単	2020年03月31日	武庫川女子大学紀要 第67巻 pp1～9	『新可笑記』巻1の5（元巻2の1）における大工の命乞ひの意味を明らかにすることによって、本章が武士は体面・評判を重んじる存在であるということをも主題として描いていたことを明らかにした。さらに、本章の第三層である重層世界は、千利休の切腹事件を枠組みとして、秀吉の長浜時代の「内証」の逸話であることも指摘した。豊臣秀吉がいかに「内証を見せざる事」にこだわり、体面・評判を大切にしていたかが取り上げられ、それが重層世界として重ねられていたのである。
22. 『新可笑記』巻二の一「炭焼きも火宅の合点」の検討―戦国武将豊臣秀吉と秀次切腹事件―	単	2020年03月20日	武庫川国文 第88号 pp35～49	巻2の1（元巻2の2）「炭焼きも火宅の合点」について、素材である『是楽物語』中巻の陶朱公の故事との比較検討を通して、作品化の具体相について明らかにした。西鶴は情愛や道理に振りまわされる生き方を「火宅無常」、「虚言・戯言」として描いていた。さらに本話に秀次の切腹事件を枠組みとして、秀吉の信長の弔い合戦や金配りの逸話を重ねることにより、「武士は道理に命を取る事」にこだわり、道理を大切にしていた秀吉の生き方を重層世界として描いていたことを明らかにした。
23. 『新可笑記』巻二の六「魂呼ばひ百日の楽しみ」の検討―戦国武将武田信玄の上洛作戦と挫折―	単	2020年03月18日	日本語日本文学論叢 第15号 pp35～52	『新可笑記』巻2の6（元巻1の6）が、西鶴の自作『懐硯』巻2の1「後家に成ぞこなひ」を素材とし、仮名草子『安倍晴明物語』の吉備真備関連の逸話、駿河の豪商友野氏の事績を重ね、『古事談』の性信親王の逸話などを付加して本話を創作していることを明らかにした。第二層（本話）は、「後家に成ぞこなひ」を「返して」、後家になる話に逆転している。さらに第三層には、武田信玄の上洛作戦とその挫折を重層世界として重ねていた。武士は道理を立てる存在であるということをも主題としていたのである。
24. 『新可笑記』巻二の五「死出の旅行く約束の馬」の検討―番号の齟齬と武田信玄の上洛宣言―	単	2019年11月01日	武庫川国文 第87号 pp27～37	『新可笑記』巻2の5の構造および主題について検討した。素材の東方朔の故事には論言を付加し、「季札挂劍」の故事には明察できない愚者を付加している。それによって、目録副題の「武士は言葉の違はざる事」に示される、武士は自己の言辞に責任を持つべきものであるということをも主題とする話を展開しているのである。さらに本章の重層世界としては、武田信玄の上洛宣言が重ねられていることを明らかにした。（pp. 27～37）
25. 『新可笑記』巻一の二「一つの巻物両家にあり」の読み―南北朝正閏争いと「二つの笑い」の内実―（査読付）	単	2019年03月31日	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編 第66巻 pp13～21	『新可笑記』巻一の二には重層世界として南北朝正閏争いという話題が重ねられていることを明らかにした。また、従来さまざまに論じられ、いまだ決着がつかない、序文の「二つの笑い」の意味についても論じた。三層構造に注目することにより、この「二つの笑い」は、第二層に表れている話による笑いと、第三層の重層世界によって引き起こされる笑いの二つであると結論した。
26. 『新可笑記』巻一の四「生き肝は妙薬のよし」の構造―夢幻能の利用と家光・正之の主従関係―	単	2019年03月20日	武庫川国文 第86号 pp33～43	『新可笑記』巻一の四について、これまで指摘されてきた素材の検討および作品世界の分析を行った。本章においては謡曲の利用が顕著であった。それは本章が夢幻能の構造を利用していることを示唆するものであった。また本話の重層世界として徳川家光と保科正之の主従関係が描かれていることを明らかにした。本章は、戦国の情緒的人格な主従関係を否定し、徳川幕府のもとでは、主命・忠義は主君にではなく、主家に対するものとする、主家と家臣という新たな主従関係を取り上げたものであったのである。殉死を生き肝殺人に重ね、それは遠い「戦国の余習」であるということをも、謡曲の夢幻世界を構造的に利用することによって描いたのであった。
27. 『新可笑記』の重層性―巻頭章と草薙の剣盗難事件―	単	2019年03月15日	日本語日本文学論叢 第14号 pp1～21	『新可笑記』がもつ重層的構造について明らかにした。具体的には、巻頭章において草薙の剣盗難事件が重ねられていること、またその意味を解明した。『新可笑記』は、(1)素材、(2)本話、(3)重層世界という三層構造を有しているのである。『新可笑記』に重層世界があるとするとらえ方はこれまでなされておらず、新たな見方である。
28. 『新可笑記』巻一の三「木末に驚く猿の	単	2018年11月	武庫川国文 第85号 pp17～26	『新可笑記』巻一の三の検討から、その三層構造について明らかにした。本章においては、徳川家光と忠長兄弟の將軍位継承争いが重

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
執心」の検討一家 光・忠長の将軍位継 承争いと武士のあり 方一				
29. 「三方一両損」の継 承一『本朝桜陰比 事』から『大岡政 談』・古典落語へ一	単	2018年03月	武庫川国文 第84 号 pp23～33	層世界として重ねられている。徳川幕府における、主命を重んじ、 人倫の鑑としての武士の存在が主題として取り上げられ、戦国の情 緒的で人格的な義から、主命を第一とする忠義への変化が描かれて いたのである。 大岡越前の名裁きとして知られる「三方一両損」は、井原西鶴が 『本朝桜陰比事』において『板倉政要』を批判的に摂取し、改変す ることによって成立したものであった。その後、「三方一両損」は 『大岡政談』において大岡越前の名裁きとして取り上げられ、さら に古典落語でも、この大岡裁きは継承される。西鶴が否定的に継承 した「三方一両損」の復活について、町人社会及び町人観の変化を 通して考察するとともに、西鶴の特質・独自性を明らかにした。
30. 「聖人公事之捌」か ら「落し手有拾ひ手 有」へ一『本朝桜陰 比事』の価値基準一	単	2018年02月	日本語日本文学論 叢 第13号 pp37 ～51	「三方一両損」は『板倉政要』『聖人公事之捌』に原型がみられ る。井原西鶴は『本朝桜陰比事』『落し手有拾ひ手有』において、 板倉伊賀守の裁きを家老の「三方一両損」の話に作り変え、それを 現実に対する認識が不足した浅知恵ともいうべきものとして描い た。「聖人公事之捌」の解決法は、金銀を重視する町人観からは受 け入れ難かったのであり、生ぬるい仲裁よりも、善悪・白黒を峻別 しようとする厳しい価値基準で西鶴は「三方一両損」を誕生させた のである。『桜陰比事』は、西鶴の新しい町人観によって創作され た、都市文学といえることを明らかにした。
31. 世之介と中居女一女 を見る行為の近世的 転換一	単	2015年03月	日本語日本文学論 叢 第10号 pp35 ～47	『好色一代男』巻1の3「人には見せぬ所」において世之介は、仲居 女の行水姿を遠眼鏡で覗き見する。従来それは、昔男や師直の近世 的なパロディであると指摘されてきたが、『太平記』等のあり方と 比較検討により、その世之介の行動には、新しい都市の共同体のあ り方が示されていることを明らかにした。また、中居女の行水や自 慰行為が、『太平記』に描かれる、高師直が奥方の風呂上がり姿 を見に行った部分から導きだされたものであることについても指摘 した。
32. 世之介の恋文一近世 都市文学としての再 生一	単	2013年03月	日本語日本文学論 叢 第8号 pp15～ 28	『好色一代男』巻1の2「はづかしながら文言葉」は、世之介の早熟 さを示すエピソードととらえられてきた。本稿では、「手紙」とい うアイテムに着目し、当時の他作品における「手紙」のあり方との 比較検討等から、西鶴が近世の新しいコミュニケーションツールと しての「手紙」に着目し、新しい価値観を描いていたことを明らか にした。
33. 浮世草子の都・大阪 一西鶴の浮世草子と 出版界の変質一	単	2012年01月	大阪春秋 145号 pp28～33	浮世草子が生み出された状況について、西鶴と大坂の出版書肆の動 向から検討した。さらに大坂で浮世草子が衰退していく状況につい て考察した。
34. 『滑稽浪花名所』と 歌川芳梅一歌川派の 上方進出一	単	2009年03月	関西文化のメカニ ズム(関西文化研 究叢書10) 武庫 川女子大学関西文 化研究センター pp49～69	江戸時代の浮世絵師である歌川芳梅・芳豊の活動について考察し た。芳梅は江戸の下って歌川国芳に師事した絵師であった。江戸の 絵師に師事した上方絵師の帰坂は、上方の浮世絵界に大きな変質を もたらしたことについて論じた。また武庫川女子大学附属図書館蔵 『滑稽浪花名所』を紹介した。
35. 西鶴作品にみられる 中国説話一その日本 化の様相一	共	2008年11月	東アジアにおける 文化交流の諸相 (関西文化研究叢 書9) 武庫川女子 大学関西文化研究 センター pp45～ 55	西島孜哉・羽生紀子共著。西鶴作品にみられる中国説話摂取の具体 相について考察した。西鶴当時、中国の書物は数多く日本に入って きていたが、西鶴の摂取方法について具体的に検討すると、西鶴は 原典そのものからではなく、日本化された中国説話を摂取している ことが明らかとなった。そして西鶴が作品化する際には、それらの 中国説話を単なる儒教の倫理としてではなく、現実的な町人の思想 として吸収・融合させているのである。
36. 大阪の人々の抛りど ころ一天下の台所一	共	2008年11月	日本と中国の基本 的人間文化一その 普遍と個別一(関 西文化研究叢 書8) 武庫川女子 大学関西文化研究 センター pp3～7	西島孜哉・羽生紀子共著。
37. 西鶴の世界観一女護	共	2006年09月	人間文化の諸相と	西島孜哉・羽生紀子共著。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
島と瀬織城ー			東アジア異文化とは何かー(関西文化研究叢書	
38. 貞享三年の池田屋岡田三郎右衛門ー森田庄太郎との提携と『好色一代女』の刊行ー	単	2006年06月	4) 武庫川女子大学関西文化研究センター pp2~11 西鶴と浮世草子研究 第1号 笠間書院 pp71~81	版下書き、挿絵師のあり方の検討から、岡田三郎右衛門が貞享3年(1686)3月刊行の『外科衆方規矩』をポイントとして森田庄太郎との提携を成立させ、商業的に完成された印刷本制作プロセスを手に入れたことについて論じた。大坂の大書肆として成長していく岡田の活動の中で、貞享3年が転換期であったのである。
39. 西鶴の創造世界ー「天下の台所」「仕出し」をキーワードにー	共	2006年03月	関西文化への視座ー享受と独創の間ー(関西文化研究叢書2) 武庫川女子大学関西文化研究センター pp80~103	西島孜哉・羽生紀子共著。
40. 上方浮世絵の周辺ー武庫川女子大学所蔵コレクションと流光斎ー	単	2006年03月	関西文化の諸相(関西文化研究叢書1) 武庫川女子大学関西文化研究センター pp146~159	流光斎の絵師としての活動の地盤として丸派狂歌サークルが関わっていることを指摘し、この交友関係が画業に影響していた可能性について論じた。また、丸派狂歌サークルには歌舞伎役者と思われる人物が多数参加していることについても指摘した。丸派では歌舞伎の鼻根であった富裕な町人が中心的狂歌師として活躍しており、芸能の土壌としての狂歌サークルという角度からも、今後考察を進めることが必要ながと明らかとなった。
41. 『戯動大丈夫』『川童一代嘯』の絶版をめぐるー大坂屋佐七と絵入り出版物ー	単	2005年01月	鳴尾説林 12号 pp1~10	『川童一代嘯』(1794序)『戯動大丈夫』(1794序跋)の絶版は、「行跡不宜候書」として版行の申請を却下されたものを内証版行・素人版行したことの結果であった。その結果だけを見ると、絶版は当然の処置であった。しかしながら、版元である大坂屋佐七、阿波屋清次の動向、さらに絵入り出版物をめぐる当時の大坂出版界の状況を視野に入れると、そこには既存勢力の新興書肆への妨害がみられるのであった。
42. 流光斎・春朝斎・桃溪と狂歌ー丸派狂歌サークルへの参加ー	単	2004年03月	武庫川国文 63号 pp28~37	上方浮世絵の祖流光斎如圭、名所図会の挿絵師として名高い竹原春朝斎とその師坂本春夕斎、版本の挿絵や一枚刷りを数多く制作した丹羽桃溪の狂歌および丸派サークルとの関わりについて報告した。いずれの絵師についても、その具体的な経歴や作画環境についてはこれまでほとんど知られていない。丸派狂歌集への入集を確認したことで、その一端が明らかとなった。また丸派での人々との交流が絵師・丸派狂歌の双方に相互に影響するものであったことを考察した。
43. 嵐璃寛と丸派狂歌ー「月並の雅薙」への参加ー	単	2003年12月	鳴尾説林 11号 pp1~11	江戸時代後期の上方で最大の狂歌サークルであった丸派サークルに参加するさまざまな階層・職種的人物の中で、本稿では歌舞伎役者初代嵐璃寛(明和6年<1769>-文政4年<1821>))とその他幾人かの歌舞伎役者と丸派との関わりについて報告した。この時期、丸派狂歌サークルは狂歌壇という特殊な文壇を構成するのみではなく、さまざまな側面に関わる文化サークルとして機能するようになっていた。丸派狂歌サークルの周辺ではビジュアルな出版物への志向が顕著であり、その志向を実現する場として、月並の雅薙が機能していたと結論した。
44. 「日本」へのまなざし:1801-1919年ー日本関連書の刊行点数の推移ー	単	2003年01月	鳴尾説林 10号 pp13~21	イギリス、あるいは英語で出版された出版物の目録であるNSTCから1801年から1919年に刊行された日本関連書を抽出し、その刊行点数推移について考察した。19世紀から20世紀初頭、日本関連書の出版点数は著しく増加しており、特に(1)1851-1890年、(2)1891-1910年に顕著な増加がみられる。この時期は日本のみならず、欧米の出版界にとっても大きな変化の時期であり、国際出版市場というべきグローバルな市場の形成へと移行していたことが予想される。世界の情報流通に変化が生じていた時期なのであり、日本関連書の出版点数の増大は、日本の開国という要因と共に、欧米出版社による出版市場の拡大という動向も視野に入れるべきことを論じた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
45. 明治期日本出版と出版離陸、その後一翻訳・輸入と海外出版市場一	単	2001年11月	鳴尾説林 第9号 pp1~12	1890年代初頭にみられる日本出版の変化について考察した。外国書籍の翻訳・輸入は、日本の開国に伴って隆盛を誇ったが、1890年代初頭には激減していることが確認できる。そしてその時期から、日本出版社と海外出版社との提携出版が行われるようになっていく。それは欧米出版社の、国際出版市場形成の動向と密接に関わるものであった。近代出版への新たな段階を迎えようとしていた日本出版の動向を、日本国内の事情のみならず、国際出版市場との関わりの中で明らかにすべきことを論じた。
46. 大坂出版界形成期における書肆の動向一 一六七一～一六八九年の刊行状況から一	単	2001年09月	武庫川国文 58号 pp31~41	書物の刊行状況の検討から、大坂出版業の形成期を1671年から1889年とし、第1期(1671~1677)、第2期(1678~1685)、第3期(1686~1689)の3段階に分けて考察した。第1期は京都書肆の影響が濃厚で、京都の庇護の下に活動が展開されていた時期、第2期は京都資本に頼らず、自律的な活動を志向する書肆が現れた時期、第3期は、京都・江戸と並ぶ出版界へと成長を果たし、他都市と対等の提携関係を結ぼうとした自律的な書肆が中心となった時期であったと位置づけた。
47. 語りから印刷本へメディア論『好色一代男』の試み一	単	2000年12月	武庫川国文 56号 pp125~137	『好色一代男』における「印刷テキスト」としての特徴について考察した。その結果、『一代男』は反復して読み、また挿絵に目を通すことによって、西鶴の意図が強烈なメッセージとなるような多層構造であり、凝った統一的な構成がとられていることを明らかにした。西鶴の浮世草子の特徴としては「咄の方法」が重視されてきたが、『一代男』の方法は、「一回性」を原則とする「咄の方法」とは異なった、「印刷本の方法」というべきものである。西鶴の方法として強調すべきは、文字テキスト、印刷本の特徴を最大限に引き出してみせたところにあるのであり、そのような後の社会のあり方を先駆的に示した点に、西鶴の画期性を認めるべきであることを論じた。
48. 益軒本の誕生一好古の死と出版メディアの転換一	単	2000年11月	鳴尾説林 8号 pp1~20	近代に至るまで大衆の知の形成に大きな役割を果たした「益軒本」誕生までの事情について考察した。従来貝原益軒は、内的な発展性から元禄12年を境に通俗的啓蒙書への意識を明確にし、それが「益軒本」として結実したとされる。しかし序文や跋文の検討からは、甥の好古が、早い段階からそのような読者への意識を明確にしていた。益軒は好古の著作に全面的な協力をみせており、さらには上方書肆の一派が連合して好古の著作に参画していた。「貝原先生」となるべき著作者として期待されていたのは好古なのであった。しかし元禄13年37歳で好古が没したことにより、新たな著作者としての役割は益軒へとシフトしていくこととなり、「益軒本」の誕生がみられたのである。
49. 出版文化と作者一貞享期の西鶴を中心に一	単	1999年12月	鳴尾説林 第7号 pp65~75	従来西鶴の作者環境について変化が指摘されることはなかった。しかし江戸時代初期の商業出版業の成立以降の作者と書肆との関わりを歴史的に吟味すると、地域性の強い俳書を刊行していた時点と、商業書肆と関わって浮世草子を刊行した時点とでは、西鶴の作者環境には質的に変化が生じていたと考えるべきである。町人作者である西鶴にとって、書肆は知的環境にも関わって先導者の役割を果たし、新たな世界を提示しうる存在であったといえ、西鶴作品の普遍性の獲得に大きな影響を与えたのである。
50. 類聚の方法の獲得一『好色五人女』の創作過程一	単	1999年12月	鳴尾説林 第7号 pp40~50	従来統一的な主題意識の下に創作されたとされる『好色五人女』であるが、内容的吟味から、西鶴の創作視点に推移がみられることを明らかにした。巻3までは事件の顛末を解釈した上で1章が創作されており、モデル小説を物語的に仕立てることに視点がある。しかし巻4以降は事件の展開に筆が費やされ、その展開に即してモデルの心が描きこまれるようになっていく。自己の解釈に先走らず、話を現実的に即して正確に提供し、その類聚の結果に統一的なテーマを感じさせるという方法的な変化がみられる。
51. 京都・大阪出版メディアの動向一見林・益軒をめぐる一	単	1999年09月	武庫川国文 第54号 pp7~16	松下見林と貝原益軒の著作の刊行のあり方から、上方の出版メディアの動向について考察した。貞享・元禄期を中心とした時期に刊行された見林や益軒の啓蒙的な著作の刊行には、伝統的な書肆とは異なった新たな志向をもつ上方の書肆との提携がみられる。より一般の人々を対象とした書物の生産を目指し飛躍的な成長を遂げた上方

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
52. 『西鶴諸国はなし』序論—外題変更の意味—	単	1998年12月	かほよとり 第6号 pp22～38	出版界の背景には、見林や益軒のような知識人と、その志向を商業的に発展させようとする新たな書肆サークルとの結びつきが存在したのである。 典拠利用の方法の分析から、『西鶴諸国はなし』の創作視点の変化について考察した。巻一・二では奇談性の高い素材に着目され、奇談的な咄に比重を置いた形で一章が構成されていたのに対して、巻三以降は咄を成り立たせる諸問題へと視点が拡大し、様々な世の出来事に対する解釈が人間の内面に即してなされるようになっていく。諸国咄形式は現実性・実用性を重視した岡田からの要求であったと考えられるが、その要求は、西鶴の人間認識の深まりに大きく作用したと結論した。
53. 井原西鶴と出版書肆—岡田・森田との相関—	単	1998年11月	鳴尾説林 第6号 pp24～35	池田屋岡田三郎右衛門と本屋森田庄太郎の二書肆と西鶴との具体的な影響関係について考察した。従来両書肆は新興書肆として同様に把握されてきたが、岡田は新興勢力との関わりを地盤として大坂に重点を置いた活動を志向していたのに対して、森田は京都出版界との繋がりを背景に学問書への志向が顕著であった。西鶴への要求も、現実性を重んじた岡田の要求は題名等の枠組みに関するものであったのに対し、森田は作品内容にまで関わるものであった。両書肆のそれぞれの要求は、西鶴の浮世草子作者としての方向性に深く作用し、西鶴文学の普遍性の獲得に大きな役割を果たしたのである。
54. 西鶴『椀久一世の物語』の出版事情—書肆森田庄太郎の関与—（査読付）	単	1998年10月	文学・語学 161号 pp110～119	貞享1、2年の西鶴に演劇界との密接な関わりを想定するところから必然化されてきた『椀久一世』の創作に、書肆森田庄太郎の要求が強く影響していることを論じた。当時の浄瑠璃作品の刊行状況から、加賀掾と西鶴の太夫・作者としての結びつきには、山本や森田という書肆の介在した可能性が高い。森田は京都出版界との繋がりの深い書肆であり、京都・大坂に跨った書肆サークルに属していたと考えられる。森田は京都の書肆と共に貞享2年の大坂における浄瑠璃興行に関わり、新機軸を出して浄瑠璃出版を隆盛に導いたと結論した。
55. 貝原益軒と書肆との交流—「日記」にみられる書肆記事—	単	1998年09月16日	武庫川国文 第52号 pp29～39	貝原益軒（1630～1714）の日記六種から書肆記事を掲出し、益軒と書肆との関わりを具体的に検討した。益軒は三都を訪れた際には頻繁に書肆を訪れ、書物の情報を仕入れている。特に京都の書肆吉野屋権兵衛とは深い関わりがみられ、益軒の情報源として重要な役割を果たしている。書肆が益軒の知的生活に深く関わり、益軒もその関わりを通して自己の交遊範囲を広げるなど、様々な面で影響を受けており、書肆が当時の知識人社会において一翼を担う重要な存在であったことが窺えた。
56. 池田屋岡田三郎右衛門の活動—西鶴周辺の書肆—	単	1998年03月	武庫川国文 第51号 pp59～74	池田屋岡田三郎右衛門の活動について、出版書目年表および周辺資料から考察した。岡田は大坂出版界の草創期から板木屋を営業し、天和3年に出版書肆へと転進した。貞享期を中心に7点の西鶴本を刊行するが、西鶴以外の作者との関わりは深くはなく、医書や雑書等の実用書を中心に刊行する書肆であった。様々なジャンルの書物を擁した地元に着目した販売重視の活動を展開し、その結果、大坂出版界において本屋行司として中心的な役割を果たすが、天明期に廃業に至った。
57. 『椀久一世の物語』の構造—虚と実の論理の対立—	単	1997年12月	かほよとり 第5号 pp36～53	『椀久一世』の登場人物のあり方の検討から、椀久の周囲の登場人物は実の論理をもつ人物として造型されているのに対して、椀久は虚の世界の構築を目指しつつも、自身が典型的・模範的な大坂町人としての論理にとらわれる人物として設定されていることを論じた。椀久が周囲の人物と対置されることによって、椀久自身に存する典型的町人としての実の論理が浮き彫りにされ、現実生活における虚と実の価値観の並立という課題が追究されることとなっているのであり、登場人物は単に椀久狂言等から摂取された人物ではなかったことを明確にした。
58. 本屋毛利田庄太郎の活動—西鶴周辺の書肆—	単	1997年12月	武庫川国文 第50号 pp98～112	本屋毛利田（森田）庄太郎の活動について、出版年表と周辺資料から考察した。毛利田は大坂出版界の草創期から本屋業を営んでいた書肆で、貞享期には西鶴本を刊行する。元禄年間には学者本屋とも称された当主の学問環境を反映し、学者・知識人たちを著者として

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
59. 岡田三郎右衛門・毛利田庄太郎出版書目年表	単	1997年09月	鳴尾説林 第5号 pp43～68	獲得し、知識人サークル周辺の書肆としての活動が確認できる。以降毛利田は着実な成長を遂げ、享保期以降は仲間行司を務めるなど、大坂出版界において重要な地位を獲得するが、宝暦年間には絶版事件を起こすなど書肆としてのあり方に問題を生じ、明和4年に廃業に至った。
60. 『諸艶大鑑』の成立—西鶴の創作意識と書肆の影響—	単	1997年03月	武庫川国文 第49号 pp90～101	全国の大学図書館を中心とした機関における所蔵調査によって明らかにした池田屋岡田三郎右衛門と本屋毛利田（森田）庄太郎の刊行書を年表としてまとめた。従来知られる岡田・毛利田の刊行書は20点程度であったが、岡田は天和3年（1683）から安永2年（1773）までに99点、毛利田は貞享1年（1684）から宝暦11年（1761）までに109点の刊行書が確認できた。
61. 『諸艶大鑑』巻一の一の吟味—世伝の設定と書肆の関与—	単	1996年12月	かほよとり 第4号 pp7～21	『諸艶大鑑』には従来本作りの雑さが指摘されている。そこで8種の西鶴作品の本文・振り仮名の衍字・誤刻・脱落等について調査を行った結果、『諸艶大鑑』の本作りの雑さは、当時の岡田の書肆としての出版機構の整わなさに起因するものであることを指摘した。また版下に検討を加えることによって、従来岡田の要求とされてきた首尾二章と副題は西鶴の意図であり、本題『諸艶大鑑』が、大坂の書肆として実用性を求め、評判記的側面を重視した岡田の要求によるものであったと論じた。
62. 『諸艶大鑑』の主題—評判記的要素との関わり—	単	1996年09月	鳴尾説林 第4号 pp24～40	従来部分的に取り上げられるに過ぎなかった巻一の一を吟味し直すことによって、世伝が世之介の継承者でありながらも、新たな価値観をもった主人公として設定されていることを明らかにした。その世伝が加筆を行うことで、『諸艶大鑑』は評判記の単なる延長線上にはない、新たな文学として創出されている。方法的展開からも『諸艶大鑑』の創作時点で西鶴が短編群の類聚形式を用いることは不可能であり、世伝は不可欠な主人公で、首尾二章は最初から付された西鶴の意図であったことを論じた。
63. 『諸艶大鑑』の主題—評判記的要素との関わり—	単	1996年09月	鳴尾説林 第4号 pp24～40	『諸艶大鑑』の評判記的要素を四つのレベルの要素に分類し、その構成のあり方を分析することによって、大きくは巻一・二と巻三以降とで、作品構成に異なった傾向のみられることを指摘した。さらに具体的に作品分析を行った結果、巻一から巻三では遊里における虚の問題が追究されているのに対して、巻四以降は虚の世界における実の問題に主題が設定されており、西鶴の主題意識に世間一般との関わりによって虚の問題を解釈しようとする方向への変化がみられることを論じた。
64. 『諸艶大鑑』の主題—評判記的要素との関わり—	単	1995年09月	鳴尾説林 第3号 pp11～23	『諸艶大鑑』の評判記的要素を四つのレベルの要素に分類し、その構成のあり方を分析することによって、大きくは巻一・二と巻三以降とで、作品構成に異なった傾向のみられることを指摘した。さらに具体的に作品分析を行った結果、巻一から巻三では遊里における虚の問題が追究されているのに対して、巻四以降は虚の世界における実の問題に主題が設定されており、西鶴の主題意識に世間一般との関わりによって虚の問題を解釈しようとする方向への変化がみられることを論じた。
64. 『日本永代蔵』の出版状況—三都の書肆と西鶴—	単	1994年12月	武庫川国文 第44号 pp47～73	中山三柳（1613～1684）は後水尾院サロンとも繋がりのある法眼で、当時の典型的な知識人階層の人物である。ただし出自は武士の子で、壮年期には伊賀の藤堂氏に仕官するなど、自己の獲得した知識によって向上する新たな階層の人物でもあった。常に自己を市井の医者として位置づけている三柳の随筆作品には、現世を力強く肯定しつつ自己のあり方を探る姿勢が窺える。8種に及ぶ著述の大半は隠居後に出版されており、そこには常に現実社会を第一義とし、それとの接点を求める三柳の生き方をみることが出来る。
65. 『日本永代蔵』の構造—創作姿勢と教訓のあり方—	単	1994年09月	鳴尾説林 第2号 pp1～14	『永代蔵』の追加稿は、西鶴が京都の文人仲間へ草稿を回覧し、その意見から創作されたこととされる。しかし当時の大坂出版界の状況、さらに版元森田庄太郎のあり方を考え合わせると、その草稿の回覧は『永代蔵』という京都と対等の草子によって京都の販売ルートへの参入を図った森田が、京都の書肆との提携を求めて提示したものであったと考えられる。京都の書肆は『永代蔵』初稿の画期性に価値を認めえず、仮名草子本来のあり方を示唆した。その意を受けた森田の要求によって、教訓性の濃厚な追加稿が創作されることとなったのである。
				定説となっている『永代蔵』巻一～巻四と巻五・六の断絶を、教訓のあり方を構造的に分析することにより、作品構造の違いとして明確に把握した。巻一～巻四までは世相や人物の説話から帰納的に教訓を導き出しているのに対し、巻五・六では特定の教訓から演繹的に具体的事実としての人物の説話を提出している。西鶴の主體的な創作方法の流れに位置づけるのは巻一～巻四で、それが初稿である。教訓的意図が濃厚な巻五・六は西鶴の方法としては異質であり、外的

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
66. 『好色一代男』の文体と主張性—文末表現を中心として—	単	1993年09月	鳴尾説林 創刊号 pp32～43	な要求から創作された追加稿であると論じた。『一代男』の文末表現には西鶴の創作意図に則った変化が認められ、特に巻六では動詞止・形容詞止が物語的作品と同比率を示している。それは世之介の精神面に着目して叙述しようとする創作姿勢の変化がもたらしたものである。また最大の特徴は全体的に形容詞系の終止文が多いことで、情意的形容詞を多用することにより、それまでに類をみないほどの主張的な文体が創出されている。それは西鶴の当代を肯定的に捉える主体的な姿勢が必要とした文体的特徴であったと論じた。
67. 『好色一代男』の構成—巻六目録の年立ては誤記か—	単	1992年11月	武庫川国文 第40号 pp107～114	従来単なる誤記として把握される巻六目録の年立ては誤記ではなく、西鶴の意図的なものであることを、内容面の構成の分析から論じた。西鶴は粋の世界は実の世界と連続性をもつものの、同時に精神的に飛躍した断絶性をもつ世界であるとしている。世之介の一代記としての枠組みには矛盾をきたすこととなっているが、そこには西鶴の粋の世界観の強調がみられる。西鶴の当代を肯定的に捉える主体的な姿勢が、年立てを重複させることによって主張されているのである。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 西鶴作品にみられる中国説話	共	2008年02月29日	東アジアにおける文化交流の諸相—さらなる相互理解と友好のために—（関西文化研究センター第5回国際学術交流フォーラム）於・中国 山東大学	西島孜哉との共同発表。
2. 大阪の人々の拠り所—大阪の歴史からみて—	共	2007年12月01日	人間文化のあり方—日中の人々は何をどのように大切にしているのか—（関西文化研究センター第4回国際学術交流フォーラム）於・中国 西安交通大学	西島孜哉との共同発表。
3. 芸術・芸能生成の文化的土壌についての相関的研究	単	2007年03月02日	関西文化研究センター第2回ワークショップ	
4. 西鶴の世界観—女護島と瀬織城—	共	2005年09月12日	人間文化の諸相と東アジア—異文化とは何か—（関西文化研究センター第2回国際学術交流フォーラム）於・韓国 韓南大学	西島孜哉との共同発表。
5. 江戸時代上方における草紙屋の動向—塩屋長兵衛の活動—	単	2005年03月22日	関西文化研究センター第1回ワークショップ	
6. 西鶴の創造世界—「仕出し」という新機軸—	共	2005年03月05日	中国と日本—関西文化の共通性と創造性—（関西文化研究センター第1回国際学術交流フォーラム）於・中国 大連理工大	西島孜哉との共同発表。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
7. 上方浮世絵の周辺—出版都市大坂の魅力—	単	2004年11月30日	学第7回MKCRセミナー	武庫川女子大学の所蔵となった上方浮世絵コレクションを紹介すると共に、上方浮世絵をめぐる文化事情の一端について考察した。
8. Late Edo Literati Salons in Kyoto and Osaka: Kyoka Poets, Artists and Kabuki Actors	単	2004年04月	Japan Reseach Centre Seminar (於ロンドン大学SOAS)	江戸時代上方の狂歌サロンへの絵師、歌舞伎役者の参加について論じた。(英語)
9. The Role of “Author Brand” Books in Commercializing Publishing in Japan	共	2002年07月12日	SHARP (国際書物文化史学会、第10回大会・於ロンドン大学)	Amadio Arboleda 日本において幾人かの「著者」がブランド化され、それらの著作が商品化されていった様相を、出版業の発展、著者意識の発達、読者の成長といった観点から論じた。(英語発表)
10. 大坂出版界形成期における書肆の動向—1671～1689年の刊行状況から—	単	2000年05月20日	日本出版学会(平成12年度春季研究発表会・於フェリス女学院大学)	大坂の出版業の始まりである1671年(寛文11年)から、出版業が軌道にのった1689年(元禄2年)までの刊行状況の分析から、第I期(1671年～1677年)、第II期(1678年～1685年)、第III期(1686年～1689年)の3期に分け、大坂出版界の発展過程とその特色について考察した。
11. 西鶴と演劇—『椀久一世の物語』の出版を通して—	単	1997年10月	全国大学国語国文学会(平成9年度秋季大会・於同志社女子大学)	西鶴の交遊サークルへの書肆森田庄太郎の積極的な関与の可能性を指摘し、西鶴のモデル小説的方法の獲得は、森田の要求によって果たされたことと結論した。
12. 岡田三郎右衛門と森田庄太郎の出版活動—西鶴と出版書肆との関連の前提—	単	1996年10月26日	日本近世文学会(平成8年度秋季大会・於同朋大学)	西鶴との影響関係が注目されてきた岡田三郎右衛門と森田庄太郎について、書肆活動の全容を報告した。両書肆は大坂出版界の草創期から出版業に関わり、西鶴本の刊行によって地歩を固めた後、大きく発展した点に共通性がみられる。しかし岡田が元禄初期までは西鶴を自己の出版活動の最重要作者として位置づけていたのに対して、森田は京都出版界との繋がりを背景に、より幅広い視野で作者を獲得しつつ出版活動を行っていたことを明らかにした。
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 第22回日本出版学会賞奨励賞受賞	単	2001年05月	日本出版学会	著書『西鶴と出版メディアの研究』および関連する研究成果に対して授与された。
6. 研究費の取得状況				
1. 科学研究費補助金若手研究(B)	単	2005年04月～2007年03月	文部科学省	採択課題名「江戸時代上方における絵入り出版物の生成環境についての研究」。第1年度60万円、第2年度50万円、計110万円の助成を受けた。課題番号:17720039。
2. 科学研究費補助金(奨励研究)	単	2002年04月	日本学術振興会	採択課題名「日本近代出版メディア形成期における新興出版社の動向-博聞社の活動を中心に-」。24万円の助成を受けた。課題番号:14902011。
3. 科学研究費補助金(研究成果公開促進費)	単	2000年04月	日本学術振興会	学術図書「西鶴と出版メディアの研究」の出版助成として120万円の補助を受けた。課題番号:125164。
4. 科学研究費補助金(特別研究員奨励費)	単	1999年04月～2002年3月	日本学術振興会	採択課題名「貞享・元禄期における作者と出版環境との関係についての研究」。第1年度120万円、第2、3年度100万円、計320万円の助成を受けた。
5. 科学研究費補助金(特別研究員奨励費)	単	1996年04月～1999年03月	文部省	採択課題名「西鶴の浮世草子の創作主題と社会的環境、特に地域及び出版環境との関連関係について」。各年度50万円、計150万円の助成を受けた。
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		
1. 2009年04月～2012年03月		日本出版学会関西委員会委員		
2. 1999年12月～現在		日本出版学会		

学会及び社会における活動等

年月日	事項
6. 研究費の取得状況	
3. 1996年04月～現在	全国大学国語国文学会
4. 1994年06月～現在	日本近世文学会